

■特定課題セッションⅡの報告

「ジェンダー／フェミニズムからソーシャルワークを問う―何が実践に求められているのか―」

コーディネーター：横山登志子（札幌学院大学）

特定課題セッションⅡは「ジェンダー／フェミニズムからソーシャルワークを問う―何が実践に求められているのか―」と題して、4人の発表者から研究報告を受け、共同討議を行った。

このテーマ設定は、「共生社会」や「多様性尊重」が強調されるなか、その内実が一体どのようなものかをクリティカルに検討したいという点が出発点にある。特に「女性」「性の多様性を生きる人」の抱える問題は、いずれも社会構造的に「つくられた排除」でありながらも、見えない構造であることが重要な特徴である。セッションでは、そのような見えない構造的問題を浮かび上がらせるような、実践的な研究報告2題と、問題を可視化するための概念装置となる理論的な報告2題の報告で展開した。

実践的な研究報告では、春木裕美会員が「医療的ケア児を育てる母親に対する支援の視点―就業を希望する母親に焦点を当てて―」について報告し、母親のケア役割と就業など個の独自性側面の両方への支援の必要性が指摘された。長安めぐみ会員は「妊娠葛藤を抱える少女との対話―メール相談におけるコンテキスト解析を援用した支援技術の可視化―」について報告し、SNS等のリテラシーから文字化して相談してくるなかで共感的にやりとりし、相談者のオラリティ（対話性）を引き出すことの重要性や、若年女性が置かれている関係構造の問題を浮かび上がらせた。

また、問題を可視化するための理論的な報告では山中京子会員が「日本のソーシャルワークにおいて『性の多様性を生きる人』を可視化するために―必要とされる視点、概念、枠組みの提案―」について報告し、セクシュアリティ概念の明確化と近年の国際的な動向を踏まえ、日本のソーシャルワーク実践・教育研修にいかに取り入れるべきかの提言があった。そしてセクシュアリティへの理解と尊厳は、ワーカーも含めて誰もが当事者であることや省察的実践の必要性が指摘された。また、宮崎理会員は「性の多様性をめぐるソーシャルワークにおける『交差性』概念の有用性」について報告があり、ソーシャルワーカーも抑圧や排除を生み出す／あるいはそれに抗うポリティカルな立場に立ちうることを自覚し、「交差性」概念の観点から社会的協働実践としてのソーシャルワークの実現にむけ、自己省察力の必要性、仲間とつながることを述べた。

共同討議では、発表者らを含め約40名ほどが（オンラインの限界はありつつも）有益なディスカッションを共有した。交差性概念の重要性は理解できるが実践理論が必要ではないかという点からは、ソーシャルワークの「マクロ実践」を精緻化する必要性が確認できた。また、交差性概念やジェンダーを含むセクシュアリティ概念は社会・文化的背景に影響を受けるほか「歴史性」の観点も重要であるとの指摘、自己省察性についてはソーシャルワークの「相談の構造」を理解すること、女性などのクライアントだけにターゲットをあてるので

はなくクライアントシステムやターゲットシステムを「関係構造」の点から見立てる必要性、性教育の遅れや問題、若者の LGBT への高い関心などが話題となった。

ソーシャルワークのジェネリックな視点として、ジェンダーを含むセクシュアリティを適切に理解し、いかにクライアントとともに社会の「交差点」に立てるのが重要だとあらためて感じた次第である。セッションに応募して下さった発表者の方、ご参加の皆様、準備をして下さった大会関係者の皆様に深く感謝申し上げます。